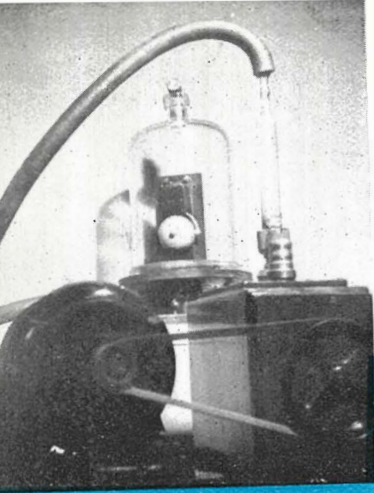


上映映画解説

1954, 3~4

国立近代美術館 フィルム ライブラリー



No. 20

月例映学会について

国立近代美術館では、フィルム・ライブラリーで内
外古今の優秀映画の収集保存ならびにその活用につ
て努力いたしております。今回は「国吉康雄遺作展」
の期間中、月例映学会として、昨年度短篇映画の優秀
作品二本を月・水曜日を除く毎日二時より上映いた
します。

雪ふみ 五巻

ビデオ映画社作品

製作……………倉口豊一
脚本……………野田真吉
演出……………道林一郎
撮影……………植松永吉

一、その意義

ほんとうに児童生徒を目標とした「児童映画」は、
興行映画の世界からはほとんどのぞむべくもない。そ
れは当然学校群を対象とする教育映画のかたちをとる
ほかないが、この方もまた受け入れ態勢がまずしいた
めに見とおしはけつしてあかるくない。それでも戦前
は約六千の小学校が学校映画会のための全国組織を結
成していたので、映画館を念頭におかない純粋の児童
映画を製作する必要性と可能性がかねてわかっており、
事実そのルートをめざしたかずかずの作品が計画的に
送りだされていたわけであるが、戦後はまだそのよう
な組織なりルートなりが具体化されるまでにはいたつて
いない関係上、児童映画の生産の必要性はあつても可
能性の方は見こみやすいということになつてゐる。
それにもかかわらず、できるだけ純粋な児童映画を
手がけるといふ冒険に乗りだす製作者は、二にとど
まらない。さまざまの悪条件とたたかひながらけんめ
いな努力をつづけるそのすがたには頭のさがる思いを
させられるが、たださんねんなことには、その考えか

たなり感覚なりが今日の教育と児童の実体から遊離し
ているために、せつかくの良心と苦斗とがそれにふさ
わしい結果をもたらさずにおわる場合もすくなくない。
そうした中であつてこの「雪ふみ」は技術的にはなほ
いろいろと注文の余地があるにしても、ともかく今日
の社会と教育と少年少女（その中心対象は中学生にな
つてゐる）の現実と即応して、そこにおける問題点の
いくつかに体あたりして行く態度が見られるところに、
五三年度につくられた他の数本の児童映画をはるかに
しのぐものがあり、またそれによつて見る人びとに意
義深く訴えかけるだけの成果が生みだされてゐるので
ある。

一、その目標

この作品の重点は「びんぼうははずかしいことでは
ない。はずかしいと思ふ気持ちをかなぐりすてて、みんな
がそろつてはだかになり、ともに力をかしかうべきで
ある」というところにあり、またそれと結びついて
「農民の生活がくるしいのはなぜだろうか」という問
題の一端も提示されている。このような問題点とじつ
くりくんでいかにせることが主目標であつて、この作品
の教育的価値はなによりもそうした点に求められるが、
副次的な目標としては「生活つづりかた」に対する関
心をよびおこすことも考慮されてゐるようであり、ま
たさらにかゝる目標になるが雪国の生活のすがたを示
すということも計算にはいつてゐると見られる。

一、その内容

これは新潟縣南魚沼郡敷神中学校二年B組生徒の合
作になる学校劇脚本「俺達は裸になるんだ」にもとず
いて「苦しい生活にガンジガラムにされるながらも、メ
ソメソしないで、勇敢にありのままの生活を見つめ、
助けあい、そこから新しい力をわきたたせてくる少年
少女たちのすがた」（作者のことばを描こうとするも
のである）。

父は老令でしごとができず、母も病身ながら一心に

カマスを織り新聞配達をしてゐる芳一少年の一家、そ

して芳一も家計を助けるべく毎朝四時に起きて道路の
雪ふみをやり、村役場から一冬三千円の手当をもらつ
てゐる。芳一の中学の同級生にも同じような境遇にい
て、先生からもつと勉強するようにといわれても、勉
強の時間さえよいにえられないものが多い。体操の
ときに上着をぬいでと号令がかかっても、下着が敷れ
たりしてゐるためにモジモジする生徒もかなりある。
ある日、人目につかぬよかくしてあつたボロくつ
の発見を切っかけに、はずかしながら気がおたがいに
ふるいおこそうという話もちあがり、それからは体
操の時間にみんなが平気で上着をぬぐうようになった。

そのうちに芳一は母の病気で学校を休まなければな
らなくなるが、かれのつくつた生活詩「雪ふみ」が先
生から級友の前にひろうされて大きな感動をよびおこ
し、つごうのつく級友たちは芳一にかわつて雪ふみを
してやろうという話もちあがつた。それを知らずに
ある朝いつものとおりうすぐらい雪道の雪ふみに出か
けた芳一は、先生もまじえた級友たちが自分より先に
雪ふみをしてゐるすがたを見いだしたのであつた。

真空の世界

一巻

日映科学映画製作所作品

製作……………石本統治
脚本・監督……………中村麟子
撮影……………広木正幹
指導……………東京工大教授 星野 豊

これは、おそらく世界一の教材映画大系をかたちづ
くつてゐる、アメリカのエンサイクロペディア・ブリ
タニカ・フィルムズ（略称EBF）の教材映画シリーズ
にならつて、同社の日本代理店である教育映画配給社
が大規模な構想のもとに企画した、いわばEBF日本
版の日本百科映画大系の第一回作品として発表された
ものである。

教材映画の組織的・計画的生産の事例としては、戦前にも大毎東日の小学校地理映画大系と十字屋の小学校理科映画大系とがあり、戦後もすでに三十余篇を送りだした社会科学教材映画大系が進行中であるが、EBFのように各部門を総合した大系は日本ではまだ手がけられたことがない。これは、そうしただけでなく、実行とみなみなならぬ困難がともなうだけでなく、組織の未熟・施設の不備など学校がわの受けいれ態勢がよいにととわぬ関係上、企業的にも絶大な不安がつきまとつていくという事情も大きくものをいっている。その点こんどの日本百科映画大系の企画にはまことに敬意を表すべきものがあり、それが日本の視覚教育の前進のためにはたす役割はきわめて大きいと考えられる。

さて、「真空の世界」は、それがこうした意義深い大系の第一作であるというほかに、つぎのようなさまざまな特色をそなえている点で、注目にあたいする教材映画であるといふことができる。

第一に、それは戦後としてはほとんど始めての本格的な理科教材映画である。もちろん「まさつ」(無声作品)とか、「凸レンズ」とかいつたごくわずかの先駆者はあつたにしても、すくなくとも十分組織的・計画的に製作された理科教材映画としてはこれが最初であるといつてよい。

第二に、それは権威あるその道の専門の学者と良心的な映画製作者との効果的な協力の好例をなしている。これまでも教材映画の製作にはかならず学者や教育者の監督なり指導なりがともなつていくが、それはたいてい大綱についての指示を仰ぐ程度にとどまつていて、この作品のように学者の実質的・積極的な指導が具体化された場合はめつたにない(社会科学教材映画大系の場合にはほほそれに近い)。これはまさに学者の構想がそのまま製作者の技術をとおして映画化されたもの

であつて、今日までほとんど理論の中のみ存在していた教材映画の本道が、社会科学教材映画大系の後につづいてそれよりもつと高度に実現されたわけである。

第三に、それは、これまで日本の教材映画の弱点とされていた、よけいなそえものをとりいれて「映画的なかたち」をつけようとする偏向から完全にぬけきつている。教材映画は特定の学習のための手段であるのだから、いわゆる映画的な味などはそれが学習効果の充実に資するものでないかぎり関心の対象になるべきでない。ところが日本ではこの教材映画の特性が無視されがちで、製作する方も「映画らしく」よそおわせることに(しばしばはその面により多く)努力をかたむけ、見る方も一般映画と教材映画とをまるきり混同してあつかおうとしている。この教材映画に関するこまつた「日本の特性」を「真空の世界」は決定的に打ち破つて、学習に役立つポイントだけをそのものズバリで提示することに全力をあげている。これが二巻物の通有概念をしりぞけて一巻になつている(百科映画大系はすべてこの国際規格を守つている)のはそのためでもある。

以上のほかに、題材への態度とあつかいかたが科学的にも教育的にも適正であること、一六ミリ撮影にもかかわらず画面効果がなかなかすぐれていること、映画に附帯する指導書(教材映画としてはこれはまことに重要である)が完備していることなど、いくつもの特色があげられるこの「真空の世界」は部分的にはまだ研究を要する点が見いだされるし、また基本的には「実験の映画化」といういきかたの点で論議の対象となりうるものをいだっていいるが、ともかく量的にも質的にも不振をつづける日本の教材映画の進展のために有意義な刺戟を与えうるだけの実質をもつていいるといえるのである。